

●ブログ「古田史学の継承のために」議論の記録 17

2017年5月11日(木)

新しいサイトを立ち上げます！

ココログでは、3つまでブログのサイトを作ることができます。

これまでの「肥さんの夢ブログ」(12年間)

「多元的「国分寺」研究サークル」(1年半)に続き、

3つめのサイト「古田史学の継承のために」を開設します。

「正しい」という言葉を使っていないのは、「正しい」「正しくない」という議論になると、「敵」「味方」ということになり、相手を倒すことが目的となってしまうからです。

なので、「みんな味方のはず。これからどうしていこうか」というスタンスで参加して下さい。

- (1) 古田史学の継承に関する真面目な発言を期待します。
- (2) 原則として、記名発言をお願いします。
- (3) 他の人の誹謗・中傷は、掲載を拒否します。
- (4) 記事のアップは、原則として朝と夜に行います。
- (5) 「私の手に負えない」と肥沼が判断した場合は、ブログは停止・廃止いたします。

2017年5月11日(木) 古田史学 | 固定リンク

コメント

肥沼さま

「新しいサイト」の開設有難うございます。

古田先生は多くの課題を残されました。例えば、法隆寺移設元の研究があります。

亡くなられた「古田史学の会」の当時の副代表であった飯田満磨さん（一級建築士）が、観世音寺に現存している塔礎石を実地調査して、その内径が法隆寺五重塔心柱とぴったりと合致していることを報告されました（「法隆寺移築元の研究その二」『古代に真実を求めて』第十二集）。しかしこの実証的な研究成果は無視され、今や後世に作られた二次史料の強引な解釈による観世音寺の白村江戦後の設立が「古田史学の会」の定説になっています。

過去多くの先輩たちが古田先生を支援し、それぞれの専門分野を生かし研究に加わられました。せっきくの成果が消されようとしています。

新しいサイトは、「国分寺研究」部門や、「土器編年研究」部門などテーマ別に別け、それぞれの地の利や仕事で培った専門分野などを生かし、多くの人に参加し研究できるようになればよいと思っています。また過去の先輩方の成果の紹介なども分担してすればよいと思います。

そして「新しいブログ」への投稿は「古田先生の方法」に基づく、即ち一次史料に基づいた研究発表をすることを原則にすべきと思います。

それぞれの思いから出発する説を受け入れ、各自が好きなことを発信すれば、「新しいブログ」はすぐにパンクしてしまうと思います。

古田先生の方法に基づいて「それぞれがベクトルを合わせ、今後も古代の勉強を進めて行きたい」というのが、小生が「古田史学の会」や「東京古田会」で報告させてもらった本来の主旨です。

「古田先生の方法」とは川瀬さんが『徹底検証「新しい歴史教科書」』の参考文献として取り上げられている、中世文書という一級史料から研究を進めている研究者たちと同じ方法です。何も特別のものでなく世界の歴史研究の常識とされている普通のものと思っています。

宜しく申し上げます。

投稿： 大下隆司 | 2017年5月11日(木) 11時57分

肥沼さんへ

新しいブログの立ち上げ。ありがとうございます。「古田史学の継承のために」というサイト名。とても素晴らしいと思います。若き日に古田さんに傾倒された肥沼さんの真摯な情熱が伝わってきます。

私自身は古田さんの「弟子」ではなく、「同志」として古田さんの研究動向を見守ってきました。それは、古田さんが御著書で展開された方法論が、私が大学の東洋史の講座で教わった実証主義史学の方法そのものだったからです。私自身のテーマが歴史研究では近代史に移り、現実の社会を足元からいかにして変えるかがテーマになっていたからでもありました。でも本当に詳しく歴史学の学問の方法を実地に教えてくれたのは古田さんの著作でした。

私は古田さんの学問の方法を次のように理解しました。肥さんの夢ブログ 2017年3月26日(日)『失われた倭国年号《大和朝廷以前》』への私の4月2日のコメントをここに再録します。

古田さんのおっしゃったという「実証より論証」ということば(出典はどこだろうか?)の意味を誤解されている方が多いように思います。

科学としての歴史学は、研究者が出した説(仮説)が真実であったと認められるのは、史料による実証が不可欠です。それもできるならば同時代の一次史料による証明が。

ただし歴史学が扱う史料は、当時の事情を示す史料がすべて残っていて明らかになっているわけではありません。これは私の東洋史の師匠から教えられたことですが「今見ている史料の多くは、意図的に残されたものか、ほんの偶然に残ったものしかない」という認識です。意図的に残されたものの多くは政権によって編纂された後代史料。当時の一次史料に基づいていたとしても、編者の編集意図という偏見でまとめられている。編纂資料を扱うときは、元になった一次史料と編者の解釈を分別する作業が必要だと。そして偶然残った史料も含めて、それらを論理的に組み合わせていくことで、失われた史料の存在を仮定し、歴史を復元するのが歴史学だとも。

つまりある説を実証しようにも、それを直接的に示す一次史料が存在しないことがある。ではその説は証明できないのか。

ここに論証という作業が入ってくる。つまり直接その説を証明してはいないが、同時代の関連史料を論理的に組み合わせることで、一つの仮説を導き出し、その仮説を導き出したときに使わなかった他の同時代史料とも、その仮説が齟齬を生じない場合においてのみ、この仮説は論証された、と判断するのです。

私は古田さんがおっしゃった「実証より論証」を、こう理解しています。ある説を証明する一次史料がない場合においてのみ使われる方法だと。これは古田さんが批判した、自説に都合の良い史料だけ取り出して論を展開したり、自説に都合の悪い史料は、自説に整合するように改ざんする、古代史学者の方法とは正反対のものです。

この後村岡さんの「実証より論証」の意味がなんであったのかを古田さんご自身が開設されたとの大下さんのコメントで意味がよくわかりました。これも再録します。

大下隆司 | 2017年4月3日コメント。

古田先生は2013年の八王子セミナーの時、恩師である村岡典嗣氏が言われた言葉として「実証より論証」を初めて取り上げられました。今まで村岡氏が言ったことの意味がよくわからなかったが、今では”村岡氏が言った実証とは「他人が言ったこと」の意味で、実証より論証とは「他人の言ったこと」を鵜呑みにしてはいけない”ということではないか、と思い出のように語られたものです。

実証主義歴史学者としての古田さんは、実証と論証とが対立するかのような様相を呈していた村岡さんの言葉の真の意味が長い間理解できなかつたのですね。「他人が実証したかのようにして提出する説に惑わされず、自分自身で史料に基づいた論証を行い、他人の論証が真に史料で実証された正しいものかどうか実証せよ」という意味だったようです。

他人の説を批判する際には、このような視点からの論証が必要ですね。これを肝に銘じて、古代史の研究に少しですが携わっていきたいと思います。

国分寺研究のほうは、今までどおりに多元的「国分寺」研究サークルの方のブログで良いですかね。ちょっと中断していますが、西海道6ヶ寺の国分寺の再検証は少しずつ進展していますので、そのうちに投稿します。

投稿：川瀬健一 | 2017年5月11日(木)16時56分

新サイトの開設ご苦労様です。古田先生との最大の論争は、「無故火起」についてでした。八王子セミナーで話す内容を先にお電話でお話いただいたときです。納得出来ず、後に多元の安藤さんが論じたことを述べて食い下がりました。古田先生であっても、自身の「学問の方法」である、当該文書における悉皆調査に基づかないと誤りうるという証明になる事例だと思えます。また、文章化されないまま終わったことが、多元の富永長三さんが優れた研究者であることと、「朝廷」(万葉集)において、「みかどには」と読むことにこだわる必要はないと、電話で上城に言われたことです。2点とも古田先生にとっては重要なことなので、ここに記させていただきます。これに関連することは、いずれ論じたいと思えます。

投稿：上城誠 | 2017年5月11日(木)18時51分

大下さん 川瀬さん 上城さんへ

コメントありがとうございます。

これからは参加者の民主的な運営のもと、

古田史学の継承のために、建設的な議論ができればいいと思います。

開設者の私はできるだけ控えた立場にいて、

「まずいことになってきている」という場合にのみ登場しようと考えています。

投稿やコメントは、真面目な内容であれば、立場がどうであれ原則としてアップさせていただきます。

自分と違う考えが掲載されても、「肥沼はそれに賛成なのか」などと目くじらを立てないようにお願いしておきます。

今は「自由に語れる場がある」ということで満足していただけたら幸いです。

人間は「自分が正しいことをしていると思っている時が一番危ない」と聞いたことがあります。

正義感に駆られて突っ走ってしまうからでしょうか。

このサイトが長く続くことになるのか、短命に終わるのか、これからの議論の内容で決まってくると思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

P S ブログのサイトの開設自体は、時間にすればわずか30分ほどでできます。

あとは「生かすも殺すも参加者次第」ということだというのが21世紀の現在の状況です。

投稿： 肥さん | 2017年5月11日(木) 23時59分

追伸

いろいろな興味深いテーマがあるのですね。観世音寺に残された五重塔の心礎の柱の大きさが法隆寺と同じという事実は初めて知りました。深めたいテーマですね。

でも私は最初に、どのようにして古賀さんの「前期難波宮九州王朝副都」説に疑問をもったのか、を時系列を追って提示しておきたいと思います。そのうえで、古賀・大下論争を時系列で追い、その論争史を学問の方法という観点で点検することで、私がどのようにして、古賀さんの説が間違いだと認定したかをここに提示しておきたいと思います。

国分寺研究については、せっかく『多元的「国分寺」研究サークル』のサイトがあるのですから、こちらに随時投稿していきます。まずは多元139号の吉村さんによる信濃国分寺についての論考への疑問と批判。今は吉村さんが依拠した文献・資料を手に入れて、吉村さんの論証を再検証しているところ。同時並行して、26ヵ国国分寺の再検証をしあげていきます。

投稿：川瀬健一 | 2017年5月12日(金) 12時46分

難波宮下層遺跡を日本書紀難波長柄豊碕宮とし、これを九州王朝の副都とする、古賀さんの論において、この遺跡を652年のものとする説明によって、九州王朝の副都の証明になるという論理の在り方が理解出来ません。このような宮の建設を九州王朝がゆるすはずがないという根拠は何処にあるのでしょうか？言葉を投げ出すだけでは論証になりません。考古学的検証と同時にこの点をあきらかにして頂きたいと思います。

投稿：川瀬さん。肥沼さん。上城です。 | 2017年5月13日(土) 17時18分

上城さんへ

652年はまだ白村江の戦い以前のこと。九州王朝が列島代表王朝であった時代。だから天子が南面して座すような宮殿を、一豪族にすぎない近畿大王家に九州王朝が許すはずがないという論理だと思います。

だから九州王朝論者としての古賀さんは、ここからこの宮殿は九州王朝のものだと論理を飛躍したのだと理解しています。

これが「前期難波宮九州王朝副都」説の誕生の動機です。難波宮下層宮殿遺構が652年だとの大阪歴博見解を盲信した結果です。

したがって何の根拠もないと思います。この遺構が670年代の天武期のものなら九州王朝論にとっても何の問題もないのですから。すでにこの時期は権力の移行期です。最近正木さんが言っているような二重権力ですらない。九州にも近畿天皇家の権力機構が置かれていたと考えます。すなわち「筑紫大宰」。

投稿：川瀬健一 | 2017年5月13日(土) 18時01分

川瀬さん、有難うございます。さて、筑紫大宰が近畿天皇家の下部組織であるとの、ご見解は、どこから導き出されたものでしょうか？お教え下さいませ。

投稿：川瀬さん。肥沼さん。上城です。 | 2017年5月14日(日) 12時04分

上城さんへ

筑紫大宰が近畿天皇家の下部組織という見解。日本書紀の記事を読んでいて、こう理解するしかないと私が判断しました。きっかけは正木さんの書紀記事 34 年遡り説を批判的に検討してきてです。まだ諸説は検討していないので、疑問点があれば出してください。

なおこうした問題をちゃんと討論したいときには、コメントにご見解を書いて、肥沼さんに「別項目」として立ててくださいと要請すれば立ててくれると思います（もしくは個人的にメールで送る）。そうすればコメント欄ではなく、項目を立てて見えるところで議論ができますので。よろしく。

投稿： 川瀬健一 | 2017 年 5 月 14 日 (日) 16 時 34 分

川瀬さん、お返事ありがとうございます。正木さんの 34 年遡り説に関しては、根拠とされた日本書紀当該部分の誤読であり、根拠とならないことを、以前多元で発表しました。筑紫大宰に関しては、初出が 609 年であり、この記事を含めて検討中です。あるていどまとまりましたら、改めてお尋ね致します。ありがとうございました。

投稿： 川瀬さん。肥沼さん。上城です。 | 2017 年 5 月 16 日 (火) 09 時 06 分

川瀬さんへ

「言素論」と「隼人」

5 月 4 日付けの川瀬さんの投稿にありました「言素論」 1～43 を遅くなりましたが、PDF 化し郵送しました。

「言素論」前半にはシベリアの少数民族に残された縄文語と共通する言葉の現地調査を踏まえた研究、そして日本の地名に残された縄文語、また朝鮮語、中国語のことなど、「言素論」の基本的な部分が記されています。後半はそれをベースに「部落言語学」「いぬひと・隼人王朝論」「縄文王朝」「倭人伝への挑戦」「騎馬民族論」などが展開されています。

「言素論 (34) - 言素論の本質 -」(多元会報 113 号)、に記された先生の「隼人論」を古田史学会の西村秀己氏が「隼人原郷」(古田史学会報 115 号)において否定し、また古賀氏が西村論文を(他の論文を例に上げてですが)絶賛したので、古田先生が会報 116 号から 119 号に於いて、「古田史学会の会は【私の学問の方法】に戻って欲しい」と呼びかけられたものです。

<言素論について小生の考え>

古代史のさらなる研究については、「中国史書」など一級史料の解読はほぼ進み、文献からの新しい展開は難しいと思っています。「古田史学の会」のように年代の移動や文言の読み替えなどになってしまいます。残されたものは「考古史料の古田史学から見た再検討と新しい発掘」、そして古田先生が取り組まれた「言素論」、すなわち日本語に残された古代の言葉の研究の二つと思っています。

<西村稿「隼人原郷」について>

ご参考までに西村稿「古田先生にお応えする」（古田史学会報117号）が掲載された時の小生のコメントを下記します（2013年8月25日記）。

1) 言素論について

古田先生は“日本語は重層語である“との視点から、欧米の言語学をベースとした現在の学会の研究方法では解釈できないとして、古代日本語の研究に取り組んでおられます。「言素論」です。

日本語の中に残されている縄文語の痕跡を探しだし、その意味を一点一点克明に調べてそれぞれの言素をもとめ、その言素を適用できる言葉をていねいに調べられています。

それを「多元の会」会報に長年にわたって掲載されその成果を蓄積されています。小生は画期的な研究として大変興味をもち勉強しています。西村説の「帰納法、演繹法」はまったく違った次元のもので、それでもって「言素論」を批判するのは、まったくの的外れと考えます。

2) 隼人論について

西村説では隼人が南九州ではないというはっきりとした根拠がしめされていません。また（西村稿の古田先生は「通説の立場にたっている」との指摘に対して）一般的に言われていることについて“特に間違っているというはっきりとした根拠がない場合”はその説が自説と同じであっても問題はありませぬ。

3) 縄文早期からの南九州文化の継続について

上野原の縄文文化は火山の噴火によって消滅しました。ただ全滅をまぬがれた熊本の人たちは噴火の後に曾畑・轟の前期縄文土器文化を立ち上げました。それが日本列島各地に広がり南米まで伝わっています。鹿児島県の縄文文化も復活しています。DNAの分析からも南九州の人たちには縄文人の痕跡が多く残っています。

鹿児島県には縄文早期からの文化が連綿と続いていることだけでも理解できるものです。

<隼人について、その後明らかになったこと>

1) 西村説のベースとなる、「北部九州の隼人」についての痕跡は一切見つかっていない。

2) 西村説が否定する「鬼界カルデラ爆発による南九州の壊滅」は、最近の発掘により火山爆発後も鹿児島県の一部地域で人々の活動は続いていたことが明らかになってきています。

3) 西村説は宮崎の本郷氏から電話から聞いたとして「熊襲と隼人」は同じとの説に立っています。しかし鹿児島国際大学の中村明蔵氏は「クマ地域とソ地域は別の地域」であるとしています。鹿児島における隼人の研究では隼人の居住地域として「阿多（川内市から南の薩摩半島）」「大隅（太平洋岸）」そして霧島市を中心とした「曾（ソ）の隼人」の三地域に分けています。阿多・大隅の隼人は古くから九州王朝の影響下にあったことが遺跡から窺えます。ただ「曾の隼人」は720年に大和朝廷軍の侵攻を受け全滅するまで独自性を保ち、土地の人々は組織的抵抗を終えたあとも霧島市国分にある隼人最後の決戦の舞台となった地「姫城」の止上（とがみ）神社に「海幸彦」を祀り、今も「隼人の霊の鎮魂」を続けています。

小生は鹿児島国分へよく行きますので、一度「隼人研究」を論文の形にまとめたいと思っています。

<言素論の研究>

「古田史学の会」は会報116号～119号の古田先生の呼びかけに答えず、「言素論」は出版もされていないためこのまま葬られていくのかと案じていました。川瀬さんが取り上げていただき有り難く思っています。このブログの名前「古田史学の継承のために」の通り、本当の古田史学を継承して勉強して行きたいと思っています。

<追記>

「古田史学の会」では隼人の乱は712年に終結したとして「大長年号」存在の根拠としていますが、『続日本紀』に記された隼人最後の戦いは養老4（720）年です。

投稿： 大下隆司 | 2017年5月20日（土）14時59分

大下さんへ

資料の整理と送付。ありがとうございます。「言素論」。届いてじっくり読めることを楽しみにしています。

残された課題が、考古学の成果の古田史学から見た見直しと言素論に基づいた研究とのことでしたが、まだまだ中国の史書や日本書紀そして続日本紀などの文献史料から明らかになることは一杯ありますよ。たとえば聖武の国分寺建立詔が実態はそうではなく、（諸国にすでにある僧寺に）七重塔を造れであることは、肥沼さんが改めて読んでみて発見したことですし、なぜ諸国の金光明経を収めた僧寺が国分寺と呼ばれるようになったのかは、私が続日本紀と日本書紀に仏教関係記事を精査して見つけたことです。読む観点を変えてみると、まだまだ文献史料からわかることは多いと思います。

隼人論の中で、鬼界カルデラの爆発でも鹿児島の一部や熊本の縄文文化は残って、その後全国に広がったとの研究成果。初めて知りました。考古学の成果でも案外知らないことは山ほどあるのでしょうね。勉強すべきことは多いです。

投稿：川瀬健一 | 2017年5月21日(日)00時06分

川瀬さんへ

「まだまだ中国の史書や日本書紀そして続日本紀などの文献史料から明らかになることは一杯ありますよ」、助言有難うございます。

「古田史学の会」が『日本書紀』記事の文字文言の読み替えや安易な年代移動、そして二次史料の史料批判なしの論証をスタートさせることなどを見ていて、一次史料の取扱いは難しくなっていると思ひこみました。労を惜しんではいけませんね。

古田先生が「古田史学会報 100号記念に寄せて」に、次のように記されています。

古田史学とは・・・中略・・・一つは「人間の論理」(道理)を根本におくこと、一つはその立場から、すべての用例(文献、考古学的出土物、その他)をひとつひとつ逐一再検証する労を惜しまないこと、この二点につきよう。・・・中略・・・このような立場に立つ限り、課題は“山”のように生れ、存在し、やがて消え、また生れ、尽きる日はないのである。

投稿：大下隆司 | 2017年5月21日(日)21時34分

2017年5月11日(木)

みんなどこかで古田史学との「出会い」があった！

古田史学に関係する研究会や旅行に参加すると、「どこでどんなふうに古田史学(古田さん古田先生、古田武彦氏、古田本)と出会うことができたか」という話で盛り上がるのが少なくありません。

今まで「歴史がどうもわからない。本当のことを知りたい」と1人で悶々としていたが、「これですっきりした。このような歴史観で考えて行けば、歴史が解明できるのだ」と、とて

もううれしい気持ちになったのだと思います。

そして、多くの人が古田さんの本を涉猟し、本棚が古田本でいっぱいになる。

これもよく話題になります。さらに、周りの人にも教えたくなる。

だんだん自分の考えというものも出来てきて、講演会で質問したりする。

そうすると、たいてい古田さんはほめて下さるので、天にも昇る心地になったりしたいと思います。

しかし、古田さんはすべてのご自分のアイデアを本にされたわけではなく、その中から仮説を立て、確かな実証や論証を経て、本にされたのだと思います。

私たちは普通は、その成果としての本からしか学ぶことができないわけですが、できればこのサイトでは、古田さんとの直接の関わりの中から、自分が学んだことや得たことを出し合えたらいいなと思います。

それは「古田さんはこう言っていた」というより、「私は古田さんにこう叱られた」という形（失敗談）の方が、多くの人に聞きやすいかもしれません。

私は幸か不幸か、古田さんに怒られたことがありません。それは私が素晴らしい考えを持っているからではなく、古田さんを怒らせるような鋭い（しかし間違っている）ことを質問したり、意見を言ったりしたことがないのだと思います。

古賀さんにしても、上城さんにしても、「私はこのように叱られました」と書かれています。私としてはうらやましく思う次第です。

そんな話をこのサイトですべて出していただけると、いいなとも思います。

最初の「新しいサイトを立ち上げます！」の原則を読んで、建設的なご意見をいただけるよう、よろしく願いいたします。